

別表 2

本人の属する世帯の階層区分		利用者負担額	加算基準額	
A	生活保護法（昭和 25 年法律第 144 号）による被保護世帯（単給世帯を含む。）及び中国残留邦人等の円滑な帰国の促進並びに永住帰国した中国残留法人等及び特定配偶者の自立の支援に関する法律（平成 6 年法律第 30 号）による支援給付受給世帯	0 円	0 円	
B	A 階層を除き当該年度分の市町村民税非課税世帯	1,100 円	110 円	
C	A 階層及び B 階層を除き当該年度分の市町村民税均等割の額のみ課税世帯	2,250 円	230 円	
D 1	当該年度分の市町村民税の課税世帯であって、その市町村民税所得割の額が右の額である世帯（A 階層、B 階層、及び C 階層を除く。）	所得割の年額 3,000 円以下の世帯	2,900 円	290 円
D 2		3,001 円以上 5,800 円以下の世帯	3,450 円	350 円
D 3		5,801 円以上 8,700 円以下の世帯	3,800 円	380 円
D 4		8,701 円以上 13,000 円以下の世帯	4,250 円	430 円
D 5		13,001 円以上 17,400 円以下の世帯	4,700 円	470 円
D 6		17,401 円以上 22,400 円以下の世帯	5,500 円	550 円
D 7		22,401 円以上 28,200 円以下の世帯	6,250 円	630 円
D 8		28,201 円以上 58,400 円以下の世帯	8,100 円	810 円
D 9		58,401 円以上 75,000 円以下の世帯	9,350 円	940 円
D 10		75,001 円以上 96,600 円以下の世帯	11,550 円	1,160 円
D 11		96,601 円以上 121,800 円以下の世帯	13,750 円	1,380 円
D 12		121,801 円以上 175,500 円以下の世帯	17,850 円	1,790 円
D 13		175,501 円以上 221,100 円以下の世帯	22,000 円	2,200 円
D 14		221,101 円以上 380,800 円以下の世帯	26,150 円	2,620 円
D 15		380,801 円以上 549,000 円以下の世帯	40,350 円	4,040 円
D 16		549,001 円以上 579,000 円以下の世帯	42,500 円	4,250 円
D 17		579,001 円以上 700,900 円以下の世帯	51,450 円	5,150 円
D 18		700,901 円以上 849,000 円以下の世帯	61,250 円	6,130 円
D 19		849,001 円以上 1,041,000 円以下の世帯	71,900 円	7,190 円
D 20		1,041,001 円以上の世帯	全 額	左の自己負担額の 10%。ただし、その額が 8,560 円に満たない場合には 8,560 円

## 【備考】

---

### 1 徴収月額の特例

- ア A階層以外の各層に属する世帯から2人以上の児童が、同時に別表2の徴収基準額表の適用を受け  
る場合は、その月の徴収基準月額の最も多額な児童以外の児童については、同表に定める加算基準  
月額によりそれぞれ算定するものとする。
- イ 10円未満の端数が生じた場合は、切り捨てるものとする。
- ウ 児童に民法（明治29年法律第89号）第877条に規定する当該児童の扶養義務者がいないときは、  
徴収月額の決定は行わないものとする。ただし、児童本人に所得税又は市町村民税が課されている  
場合は、本人につき、扶養義務者に準じて徴収月額を決定するものとする。

### 2 世帯階層区分の認定

#### (1) 認定の原則

世帯階層区分の認定は、当該児童の属する世帯の構成員及びそれ以外の者で現に児童を扶養してい  
るもののうち、当該児童の扶養義務者のすべてについて、その市町村民税等により行うものである。

#### (2) 認定の基礎となる用語の定義

- ア 「児童の属する世帯」とは、当該児童と生計を一にする消費経済上の一単位を指すのであって、夫  
婦と児童が同一家屋で生活している標準世帯は勿論のこと、父が農閑期で出稼ぎのため、数カ月別  
居している場合、病気治療のため一時土地の病院に入院している場合、父の職場の都合上他の土地  
で下宿し時々帰宅することを例としている場合などは、その父は児童と同一世帯に属しているもの  
とする。
- イ 「扶養義務者」というのは、民法第877条に定められている直系血族（父母、祖父母、養父母等）、  
兄弟姉妹（ただし、就学児童、乳幼児等18歳未満の兄弟姉妹で未就業の者は、原則として扶養義  
務者としての取扱いをしないものとする。）並びにそれ以外の三親等以内の親族（叔父、叔母等）  
で家庭裁判所が特別の事情ありとして、特に扶養の義務を負わせるものである。ただし、児童と世  
帯を一にしない扶養義務者については、現に児童に対して扶養を履行している者（以下「世帯外扶  
養義務者」という。）の他は、認定に際して扶養義務者としての取扱いを行わないものとする。

#### ウ 認定の基礎となるのは、

I 所得税法（昭和40年法律第33号）

II 租税特別措置法（昭和32年法律第26号）

III 災害被害者に対する租税の減免、徴収猶予等に関する法律（昭和22年法律第175号）の  
規定

IV 平成30年8月30日健発0830第7号厚生労働省健康局長通知「小児慢性特定疾病児童等日常生活  
用具給付事業における寡婦控除等のみなし適用に係る取扱いについて」によって計算された地  
方税法により賦課される市町村民税（ただし、所得割を計算する場合には、地方税法第314条の  
7、第314条の8、同法附則第5条第3項、第5条の4第6項及び第5条の4の2第5項の規定  
は適用しない。）、生活保護法による被保護世帯（単給世帯を含む。）及び中国残留邦人等の  
円滑な帰国の促進並びに永住帰国した中国残留邦人等及び特定配偶者の自立の支援に関する法  
律による支援給付（以下「支援給付」という。）である。

・平成23年7月15日雇児発0715第1号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「控除廃止の影響を  
受ける費用徴収制度等（厚生労働省雇用均等・児童家庭局所管の制度に限る。）に係る取扱いにつ

いて」（以下、本通知）の規定によって再計算しない取扱いを原則とする。ただし、令和2年3月31日以前に日常生活用具の給付を受けている児童等が属し、その徴収基準月額算定のあたり本通知を適用していた世帯については、それまでに判定された階層区分から不利益な変更が生じることがないように、都道府県等の判断により、本通知の規定による調整方法を行うことにより経過措置を講じることも可能とする。

- ・指定都市に住所を有する者の市町村民税所得割を算定する場合には、これらの者を指定都市以外の市町村の区域内に住所を有する者とみなし、地方税法及び航空機燃料譲与税法の一部を改正する法律(平成29年法律第2号)第1条による改正前の地方税法に規定する個人住民税所得割の標準税率(6%)により算出された額を用いることとする。

- ・生活保護については、現在生活扶助や医療扶助等の保護を受けている事実、支援給付については、支援給付を受けている事実、市町村民税については、当該年度の市町村民税の課税(地方税法292条第1項第11号イ中「夫と死別し、若しくは夫と離婚した後婚姻をしていない者又は夫の生死の明らかでない者で政令で定めるもの」とあるのを「婚姻によらないで母となつた女子であつて、現に婚姻をしていないもの」と読み替えた場合に同法第295条第1項(第2号に係る部分に限る。以下この号において同じ。))の規定により当該市町村民税が課されないこととなる者及び同法第292条第1項第12号中「妻と死別し、若しくは妻と離婚した後婚姻をしていない者又は妻の生死の明らかでない者で政令で定めるものを「婚姻によらないで父となつた男子であつて、現に婚姻をしていないもの」と読み替えた場合に同法第295条第1項の規定により当該市町村民税が課されないこととなる場合を含む。)又は免除(地方税法第323条による免除。以下同じ。)の有無をもって認定の基準とする。

- ・当該年度の市町村民税の課税関係が判明しない場合の取扱いについては、これが判明するまでの期間は、前年度の市町村民税によることとする。

### (3) 徴収基準額表の適用時期

毎年度の別表2「徴収基準額表」の適用時期は、毎年7月1日を起点として取扱うものとする。

3 徴収基準額表中、徴収基準月額欄に「全額」とあるのは、当該児童の措置に要した費用について、市町村が徴収する額は、費用総額を超えないものであること。

### 4 徴収金基準額の特例

災害等により、前年度と当該年度との所得に著しい変動があった場合には、その状況等を勘案して実情に即した弾力性のある取扱いをして差し支えないものとする。

### 5 その他

令和元年度の生活保護基準の見直しによる影響を受けないよう、「児童福祉法による保育所運営費国庫負担金について」(昭和51年4月16日厚生省発児第59号の2厚生事務次官通知)第4保育所徴収金(保育料)基準額表参考3(3)に準じて、B階層の対象世帯のうち、特に困窮していると市町村の長が認めた世帯についても、A階層と同様の扱いとすること。